

外来文化の受容

窪 徳忠[※]

外来文化は、当然のことながら、つねに固有文化にとっては異質的である。それにも拘らず、なんらのトラブルもなく受容される場合がある。私は、その場合には、外来文化が固有文化にあるように受容することと、後者が前者に親近性または類同性を認めることの2条件が必要と考える。つぎに、その点を中国に伝来した1, 2の宗教を例として考えてみよう。

紀元前後に中国人に知られた仏教は、神仙思想, Shamanism, Animism ぐらいしか知らなかった当時の中国人にとっては、その作法といい、行法といい、さらには僧形にしても、まったく異質的であった。そこで仏教側は、異質感を改めさせる目的の一方便として、“老子化胡説”を説いた。その内容は、周の衰退をみた老子は函谷関を出て西にいて釈迦となり——もしくは釈迦を弟子として——仏教を説いたというのである。もちろん通説では、この説は道教側が仏教側を凌駕する目的で作為したとされている。けれども、当時道教的教団はまだ未成立だったから、私は仏教を円滑に理解、受容させる方便として、仏教側が考案したのではないかと考えている。ただし、のちにはもっぱら道教側が仏教を抑える目的で説いたことは、いうまでもない。

一方、『三国志』『魏志』東夷伝にひく『魏略』には、仏經の説は老子經すなわち『老子道德經』と類似するとみえ、『後漢書』には明帝の異母弟の楚王英が、黄老の微言を誦えるとともに、浮屠(仏)の仁祠を尊んだとか、桓帝が宮中に黄老・浮屠を併せ祀ったなどみえ、『晋書』五行下には、4世紀前半ごろの中国仏教発展の中心人物ともいべきクチャ出身の僧仏図澄を「術者」と表現している。すなわち、中国側では仏、仏典、僧侶などを、自己のもつ知識に惹き着けて解釈しているのである。

こうして、中国に受容された仏教は、のち三武一宗の法難や、儒教道德の孝を取入れながら、しだいに中国仏教として成立していくのである。

3世紀にイランで起ったMani教は、7世紀に中国に伝わった。当初は仏教の一派を装っていたが、唐の武宗の廃仏事件で弾圧されたのちには、仏教的秘密結社の体制をとった。さらに北宋朝に入ると、Maniを老子に結びつけ、『老子化胡經』を作って、道教化を試みる。同經は、P. Pelliotが敦煌で発見し、現在『大正新修大藏經』に入っている。Mani教では明暗の二宗と過去・現在・未来の三際を説くが、これを巧みに中国仏教に結びつけた。さらに、つぎの北宋時代には、道教の一切經が編集される際に、編者に賄賂を贈ってMani經を入蔵させたりした上、寺院に道観そっくりの外観を備えさせ、住持を道士とよばせている。これでは、なにも知らない世人ばかりでなく、宗教関係者でさえ道教の一派と受けとるであろう。こうして、いつしか道教のなかに

※東京大学名誉教授

埋没してしまったのである。現在、道蔵中から関係の經典を探しだすことは、困難である。

Alexandro Valignani の求めに応じて、1582年に厦門に上陸した、中国天主教の父ともいえるべき Matteo Ricci は、翌年広東省肇慶府に落ち着いた。そして、それまでの神父たちの方針に沿って布教したが、4年間に3人の信徒しかえられなかった。のち、南京に移っても同様だったが、人々に天文や曆術の知識を与える一方でカトリックの教義を説くと、しだいに信者がふえだした。Ricci は、多くの批難に堪えながら、人々が神父を「西僧」とよぶのを幸い、みずから僧衣をつけて西僧と自称し、中国語や習俗の習得に努めた。そのうち、僧侶道士が学識がなく、道仏二教が軽蔑されていることを知り、1585年利瑪竇、号を西泰と名のり、儒教に改めて西儒と称し、礼儀から生活様式まで中国風とした。さらに一步を進めて、教義まで儒教に附して、中国的に説いた。『天主実義』を一読すれば、きわめて明らかである。中国人を欧化するのではなく、みずからが中国化したのである。

そのために、ある儒家は、天主教は仏道より儒、とくに墨子の教えに近いといい、別人は中華の風を慕ってきた西方人は、儒理にかなない、格言が多いとのべている。一般人には、不老長生薬の金丹のつくり方を学ぶためや治療のために入信した人もいれば、福をうるための人もいたという工合に、現世利益をえる目的の入信者も少なくなかった。こうして、一応の成功をみたものの、Ricci の死後布教方針が変わると、排斥運動が起こり、ついには典礼問題から康熙帝により禁止令の発布となるのである。

以上、外来文化の伝来とその受容の条件についての私見をのべたが、これはまったくの試論にすぎない。会員諸兄自身の研究に照らして、ぜひその当否を判断し、示教をえたいと思っている。

新刊紹介

吉岡郁夫著

『いれずみ（文身）の人類学』

形質人類学方面の興味深い論考を積極的に発表されている氏が『身体の文化人類学—身体変工と食人—』（1989）の続判ともいえる本書を出された。潜水する海人に外耳道外骨種が多いことから、広島県大田貝塚の縄文人骨にこの症例がみられることで、倭の水人を想定した論考は本誌の10号に掲載されたので著者の視点は既知の人も多いであろう。

医者である著者が文身皮膚の取除きで入墨に縁を持ったこともあとがきでふれられているが、関心は弥生時代から古墳時代まで、また近年まで琉球やアイヌの人々の間で行なわれた習俗としての文身の変遷にあるという。

構成ははじめに『魏志倭人伝』に由来する文身をいれずみを表すタームとして使うこと、文献資料によって論を進めることを述べ、第1部日本の文身習俗 1. 縄文時代の文身 2. 縄

文時代の海人 3. 弥生時代の文身 4. 古墳時代の文身 5. 古代以降の文身 第2部日本周辺の文身習俗 1. アイヌの文身 2. 琉球の文身（針突） 3. 台湾高山族（高砂族）の文身 4. ミクロネシアの文身 5. マーシャル諸島の文身 第3部医学と人類学の周辺 1. 文身と習俗 2. 文身の医学 3. まとめ—東アジアの文身習俗—の三部だてであり、巻末に引用文献を付している。第3部の皮膚科的解説は著者ならではのものである。縄文時代の文身習俗の存在に対しては、海人のごく一部に行なわれたとのひかえめな見解をとっている。いずれにしる学説を丁寧で紹介し、自説を開陳したいれずみの研究百科、今後のいれずみ文化研究に避けて通れない一書といえる。（佐野賢治）

1996年9月刊行 A5版 276頁 雄山閣出版